

「初夏のキノコ(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

キノコのシーズンといえば秋だが、この季節を好むキノコも多い。特にハツタケ(初茸)の仲間は、多くの種類が初夏に発生する。



山荘の裏庭に、紫褐色のキノコが、点々と発生しているのを見つけた。大小さまざまで、傘の開き方もいろいろである。これは1種類のキノコでも、さまざまな成長過程が見られるからだ。キノコは種子植物でいえば花か果実に対応し、菌体の大部分は地面の下にある。1本の木の花が、一斉に咲かないのと同じで、キノコも少しずつ発生するのだろう。



キノコは地面から発生したばかりの時は、こんな姿をしていることが多い。これを「幼菌」という。この段階では、傘の裏のヒダも密で、胞子はまだ形成されていない。傘も茎(種子植物の茎とは意味がちがう)もまだ固く、虫に食われていることもほとんどない。この段階で食われては意味がないのだ。



このキノコは、カワリハツ *Russula cyanoxantha* というハツタケの仲間(ベニタケ科)である。1種類のキノコで、紫、茶、緑など、さまざまな色のバリエーションがある。写真は成菌で、傘の中央が窪んでいる。



さらに時間がたつと、虫に食われて、だんだんボロボロになっていく。虫に食われるのは、キノコにとっては都合なことだ。胞子を拡散してくれるからだ。雨が降ると、窪みに水がたまっていることもある。



最後はこんな姿になる。カワリハツの場合、幼菌からこの姿になるまでに2日程度しかかからない。その間に、おびただしい数の胞子を散布するのだ。このあとバラバラに腐って、土にもどることになる。